

# 平成 29 年度 東山会会報

名古屋大学工学部機械系学科同窓会 東山会 平成 29 年 12 月発行



## 【目次】

●副会長挨拶	昭和 53 年卒業 (第 37 回)	酒井 康彦	副会長	P1~2
●特別寄稿	昭和 41 年卒業 (第 25 回)	三矢 保永	氏	P3~6
●着任の先生の挨拶		野老山貴行	准教授	P7
		上野 藍	助教	P8
		前田英次郎	助教	P9
		青山 忠義	助教	P10
●退職の先生のお言葉	平成 14 年卒業 (第 61 回)	中島 正博	先生	P11
●会員からの便り	昭和 52 年卒業 (第 36 回)	渡邊 激雄	氏	P12~13
	平成 9 年卒業 (第 56 回)	大黒 太朗	氏	P14
●学内近況		松本 健郎	教授	P15~16
●掲載原稿募集 (同期会等の報告)				P17

## 副会長挨拶

東山会 副会長

酒井 康彦

昭和 53 年卒業(第 37 回)



### ご挨拶

平成 28 年度に副会長という重職を拝命し、今年が 2 年目になります。土屋総二郎会長のもとで、山田陽滋庶務理事を初めとする理事の方々と事務局担当職員の伊藤恵子様とともに東山会の行事に係らせていただいております。日本民族の特徴は、「恩誼を知る」ことであるといわれております(新渡戸稲造「自警録」第十八章)。1950 年に発足した東山会の歴史の重みと諸先輩方から受けた脈々たる有形無形のご恩を思うとき、感謝と喜びの念を深める次第でございます。任期はあと半年あまりとなりましたが、私自身もなにかしら皆様のお役に立てればと、微力を尽くしてまいりたいと思っております。

東山会の行事は毎年恒例になっており、平成 28 年度は 5 月に関東支部総会・懇親会、7 月に第 16 回イブニングサロン、11 月に関西支部総会・懇親会、12 月に第 17 回イブニングサロン、3 月の卒業式の日、東山賞授与と新入会員歓迎会と順調に企画、実施されました。平成 29 年度に入ってから、5 月には関東支部総会・懇親会が開催されましたが、6 月に開催予定であった第 11 回「東山へ帰る日」につきましては、申込人数が僅かのため残念ながら開催できませんでした。今後は、11 月 11 日に関西支部総会・懇親会、12 月 14 日に第 18 回イブニングサロン、来年 1 月 27 日には総会、新年同窓会および特別講演会、そして 3 月 26 日の卒業式における東山賞授与と新入会員歓迎会が予定されております。

現在は、第 18 回イブニングサロンと総会・新年同窓会・特別講演会に向けて鋭意準備中でございます。また、6 月に実施できなかった「東山へ帰る日」の代替行事も検討を始めております。今回のイブニングサロンは日本機械学会東海支部との合同企画として実施され、キャリア技研(株)の富田茂様、および三菱自動車工業(株)の久米健夫様のご講演が予定されております。また、新年同窓会においては、トヨタ自動車(株)の吉田守孝様(トヨタ自動車名大会会長)に特別講演をお願いしております。これらの企画内容は順次ホームページ等で皆様にお知らせする予定です。ぜひ奮ってご参加賜りますようお願いいたします。

さて、本同窓会の母体である名古屋大学工学部機械系学科・大学院機械系専攻は平成 29 年 4 月より工学部・工学研究科の改組に伴い、その組織や教育内容が大きく変わりました。工学部・工学研究科全体の改組の概要につきましては、昨年の会報にて新美智秀工学研究科長・工学部長(名古屋大学工学部第 36 回卒業生)の「学内近況」で報告されておりますが、機械系学科・専攻としては、従来の機械・航空工学科(機械システム工学コース、電子機械工学コース、航空宇宙工学コース)のコース別教育が廃止され、機械・航空宇宙工学科として 1 年生から 4 年生まで一括して教育を実施するということになりました。従来方式では、学生諸君は機械・航空工学科として入学し、2 年次で各コースに別れ、別々のカリキュラムで教育を受けておりましたが、本年度からは入学から卒業まで同じカリキュラムで授業を受けて、卒業することになります。大学院の方は、上記機械・航空宇宙工学科の上に機械システム工学専攻、マイクロ・ナノ機械理工学専攻、航空宇宙工学専攻の 3 専攻が設置されることになりました。学部や大学院の内容は HP (<http://www.engg.nagoya-u.ac.jp/>) をご覧いただければ幸いです。東山会では、この改組に伴い、従来の機械系同窓会「東山会」、電子機械同窓会「伊吹会」、航空系同窓会「高翔会」の将来の形について議論が始まっております。今後、伊吹会、高翔会との調整が行われ、名古屋大学機械航空系同窓会として将来大きく発展していくことが期待されます。

東山会は多くの方々によって支えられております。東山会の運営に係わっておられる方々や各種行事にご参加していただいた方々と接しておりますと、ふと「唯和気熱心な人のみ、その福も亦(また)厚く、その沢(うるおい)も亦長し」(洪自誠「菜根譚」前集 73 項)ということばが思い出されました。東山会同窓会の皆様のご幸福を願いつつ、本会の発展のために皆様の多大なご理解、ご支援を賜りたくお願い申し上げます。

名古屋大学名誉教授  
名古屋産業科学研究所上席研究員

三矢 保永

昭和 41 年卒業(第 25 回)



### 分水嶺を越えて

#### 1. はじめに

定年まで勤めて退職することは、人生行路の分水嶺を越えたことを意味する。定年時の最終講義の締めくくりで、「分水嶺に至るまでに社会から授かり蓄えることができたポテンシャル（位置エネルギー）を、分水嶺を越えて下りながらはき出していくなかで、社会に恩返ししていればできればいいなあ」という趣旨を話した記憶がある。社会への恩返しとは、見返りをとまわらないボランティア活動であり、ひとつは大学で従事してきた専門分野でできること、もうひとつは専門分野から離れてもできることを挙げておいた。それから。もはや十年が経過してしまった。本稿の執筆の機会に振り返ってみると、自画自賛の分を割り引いても、おおむねこの道筋からかけ離れてはいなかったと思えるのは幸いなことである。

#### 2. 翻訳ボランティア

専門分野については、名古屋産業科学研究所に新たに研究部が発足し、上席研究員として研究を継続できる環境が得られたことが幸運であった。分水嶺を越えた先生方に活躍の場を提供するために、発足に尽力された名大名誉教授 H 先生の指導力なくしてはありえなかった。本文の内容とは関係しないが、記憶にとどめておきたい。

現役中には、専門分野の学会に多大にお世話になってきたので、なにかお返しできるものはないか、と思いついたが、専門書の翻訳出版である。東工大名誉教授 O 先生との共訳で、翻訳作業に取りかかってからまるまる 3 年をかけて、2013 年末にやっと完成した。なんとか、2 刷りになるまでには売れてはいるようではあるが、印税収入どころではなく、出版経費は持ち出しのままで、3 年間の労力

はまさにボランティアとなっている。関心のあるかたは、ぜひ「マイクロ・ナノスケールのトライボロジー、吉岡書店」を購入して、赤字分の補填にご支援いただければ幸いである。(趣旨を理解して出版に応じていただいた吉岡書店の支援なくしてはありえなかった。古い文化を大切に残す京都ならではの出版社であり、ずっと残ってほしいと願っている。)

### 3. 博物館との関わり

私にとっては、専門分野以外の活動のほうに、より充実感を覚えている。主には名大博物館を通じてのボランティアであるが、このような機会に恵まれたことは、偶然というか必然というか、そういう運命にあったとしか思われぬ。きっかけは、2013年に名大博物館野外観察園で写真展「空 雲 光」を開催していただいたことである。このときの来場者数は、某新聞社のイベント案内に3週間にわたって掲載されたこともあって、観察園イベントの来場者数の最大記録になっているとか。これが機縁となって博物館友の会に写真サークルが設けられ、現在は分不相応なことにも講師役を引き受けている。関心のあるかたは、名大博物館友の会に入会していただき、ついでに写真サークルにも、エントリーしていただきたい。その他にも、博物館にある学術上貴重な収蔵品をデジタルアーカイブス化するための写真撮影や、前穂高岳におけるナイロンザイル事故に関連するイベントの講師(ながら山登りの楽しみ方 一雲を読む、風を読む、光を読む)などで登場する機会をいただけてきた。

### 4. 山の贈りもの

ボランティア活動の多くは、元をたどってみれば、私の道楽である山登りから得られたものが機縁になっている。これを「山からの贈りもの＝山の贈りもの」ということにしよう。そもそも、名大博物館とのつながりができたのも、山の贈りものである。名古屋大学に職を得たあと、49才にして山登りを再開した。最初のうちは家族と一緒に、家族が着いてこなくなると、学生達や事務の方々を巻き込んで山の会を結成して、青春時代のごとく山登りを楽しんでいた。当時の大学キャンパスには、まだ牧歌的な雰囲気が残っていた。この会の主要メンバーが博物館に異動したことで、博物館とのつながりができたのである。



定年後には時間の余裕ができたので、ゆとりをもって山登りを続けているが、登山スタイルは変わった。天気を読んで前日に登山口に入り、そこでテントを張って一夜を過ごし、翌日早朝から登り始めることが多くなった。当然単独行が多くなり、沈思黙考している期間が長いのである。自然の中にどっぷりと浸かっているスタイルは、串田孫一風の哲学型登山のようにも受け取られかねないが、とくにストックになにかについて考え込んでいるわけでもない。テント場では、耳に入るせせらぎの音や鳥の声を聴き、眼に入る山の彩り、雲と空の変化を見て、ただぼんやりしているだけで、時間が過ぎていく。登山中は、危険箇所や分岐点、あるいは撮影ポイントでもなければ、足下に目配りしながらも黙々と足を運んでいるだけである。

◆  
これまで数多くの山に登ってきた。若い頃には、山道具に加えて当時の重いスキーまで背負って、あちこちの山で春山スキーを楽しんでいたし、ワンゲル風にテントと自炊用品を背負っての長い縦走も、楽しさのほうに優っていた。若いときから一貫しているのは、なにかの目的のためではなく、ただ自分のためだけに登っていることである。実利もなく無目的的にエネルギーを消費しているじつに自分勝手な行為なのである。

◆  
「日本百名山」の著者深田久弥は、本書のあとがきによれば、少なくとも1000以上の山に登っていることになる。今西錦司は3000の山に登ったと、なにかの本に書いてあった。冒険的な登山家でもなく、競争的な登山家でもなく、たかが一介の大衆登山者にすぎない私の場合には、公言するほどの価値もないが、これまでに登った山の数は、通過点にすぎないようなマイナーな山まで含めてやっと数百ぐらいにすぎない。それでも、じつに多くの贈りものを山からもらった。汗をかいた分だけ得られる充実感、山頂からの大展望や空・雲の変化を眺める爽快感、疲労困憊や危機一髪を乗り越えた達成感などの実体験が、撮影した写真や行程記録などととも、この歳で社会に恩返しできる原動力となっている。自分勝手にやってきたことで、社会に恩返しできる機会が得られるとは、なんともありがたいことである。

◆  
道楽という言葉には、マイナスのイメージが先行しているが、仏教用語で「仏道修行によって得た悟りの楽しみ」を意味する。信仰心に厚いわけでもなく、仏道修行の経験もないので、「悟りの楽しみ」がどのようなものなのか実感できないが、悟りに至るとなにか楽しみがあるようである。山中でたまにお目にかかる山伏（修験者）は、密教でいう山岳修行者であり、深山幽谷に入って修行を行うことが、悟りの境地に近づく手段とされている。非日常的な深山幽谷に入るといふこと、あえて危険を承知で重労働に耐えるということでは、大衆登山と類似している。違いは「悟りを得ようという」目的があるかないか、いや目的意識をもつかもたないか、という点だけにあるようにも思われる。若い頃には全く思いつかないことではあったが、山登り（大衆登山）の楽しみは、「悟り」の一端に触れることではないか、と思えるようになった。同じ趣旨の解説が天台寺門宗のウェブサイトに掲載されているので下記に引用しておこう。」

「現代にあっても山に登って、きれいな大気を呼吸し、身心を鍛えることは、何より大切なことです。自然と一体となること、ひたすら山に登り、自らを大自然の懐にたくし、山に生きる動物や虫、樹木や草花にいたるまで生きとし生けるものすべてが、一つの生命であることを実感することができれば、それがそのまま修験道が目指す「即身成仏」の悟りの境地に近づいたことになるのです。」

出典 <http://www.tendai-jimon.jp/trainee/index.html>

◆  
このような日本人に特有の自然観は、日本の豊穡な自然や振幅の大きい季節変化のなかで生活してきた日本人の祖先たちが、何代にもわたって直接体感するこ



とによって培われてきた。しかし、高度成長期を経て、グローバル化の進展や、SNS の普及によって、そのような機会が失われ、また自然観も変貌しつつあるように思われる。時代の流れに抗うことができないが、一時でも、自然にどっぷりと浸かって頭を空っぽにしてみることは、グローバル化や SNS 社会の普及とともに、生き物としての人間性が希薄化しているなかで、自然のなかで生きる生き物としての人間性を見つめ直すよい機会を与えてくれるはずである。

## 5. おわりに

古希を過ぎ分水嶺からずいぶんと下りてきて、もはや終着点が見え始めていることもたしかである。最近では、どの山に行っても、その場の最高齢者になってしまう。最高齢者といっても、ダントツの場合が多い。「そんなお歳で」と心配されるよりも、「こんな歳の人でも」という安心感を与えるようである。余談になってしまうが、私の出身地の図書館祭りで「工学者が読み解く万葉の空と雲」という講演を行う機会があった。この講演に遙かに遠い茨城県北部から、山ガール 1 名が、深夜運転で駆けつけてくれた。図書館の担当者も驚いたが私の驚喜も並大抵ではなかった。目立たない私にはそんな引力があるはずもないので、私の山への向かい方に安心感を覚えて、それが引力になったのかもしれない。

今や、私にとっては山登りが「生きている証」にもなっているが、体力的に止めなくてはならなくなるのも、そう遠くではない。しかし、山の贈りものは、私の体の中に存在し続けることはまちがいない。多くの大衆登山者も同じ贈りものを山からもらっているはずだが、それが「悟りの楽しみ」と気づくのは、たぶん、分水嶺を越えて終着点が見え始めてからになるだろう。

## 着任挨拶

名古屋大学 大学院工学研究科  
マイクロ・ナノ機械理工学専攻  
マイクロ・ナノ機械科学講座  
生産プロセス工学グループ

**野老山 貴行 准教授**



2017年4月1日よりマイクロ・ナノ機械理工学専攻、マイクロ・ナノ機械科学講座、生産プロセス工学グループ梅原研究室の准教授に着任いたしました野老山貴行（ところやま たかゆき）と申します。2006年4月から2014年3月まで同研究室にて助教を務め、2014年4月から2017年3月まで秋田大学大学院工学資源学研究科（現 理工学研究科）にて准教授を3年務めた後、同研究室の准教授として帰ってまいりました。

秋田大学在籍時は大変短い夏と11月から降り始める雪、12月にはハタハタ漁の解禁を告げる天変地異クラスの雹（ひょう）と霰（あられ）と雷、入試前には学内の凍結路面をピッケルで掘り返すなど、名古屋とは全く異なる環境で、大変勉強になりました。『雪かきは重労働』ということが本当によくわかりました。『着氷警報』なるものが存在することも初めて理解でき、寒冷地にとって氷や霜の付着は、生活に直結する大変身近な問題です。表面の凹凸と濡れ性の制御により着霜を抑制することや、着霜方向を制御できる表面創製を目指して、走査型電子顕微鏡内でのマイクロメートルスケールの霜成長の観察を行っております。

また、元々の専門であるトライボロジー分野では、炭素系硬質薄膜の実用に注力し、エンジン油に含有される添加剤と炭素系薄膜との摩耗促進機構の解明とその抑制、摩耗量を予測できる立式、炭素系薄膜の摩擦に伴う構造変化のその場観察、境界潤滑面内への摩耗粒子侵入のその場観察など、『見える化』に注力しております。

自動車産業をはじめとする多くの産業が集積している東海地区において、東山会の皆様からご指導・ご鞭撻をいただける機会をいただけますと幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。



## 着任挨拶

名古屋大学大学院 工学研究科  
機械システム工学専攻

上野 藍 助教



2017年11月1日より機械システム工学専攻、機械理工学講座、熱制御工学研究グループの助教に着任しました上野藍と申します。2012年に東京大学で博士号を取得し、同大学でのポスドクを経て名古屋大学の機械システム工学専攻に異動して参りました。

博士課程および研究員時代は、「近接場効果を用いたマイクロスケールの熱流動の最適設計・最適制御手法の研究」に従事し、伝熱工学、宇宙工学、MEMS 技術を軸に研究を進めて参りました。本学着任後は、今までの経験に、本学で得られる知見を融合し「マイクロ・ナノスケールにおける新たな伝熱制御手法の開拓」に取り組んでおります。

私は、東京で生まれ育ち、多くの時間を関東で過ごしたため、新天地として愛知県名古屋市に引っ越してくるのは人生の中でも大きな出来事でした。東海地方という関東と関西の文化が混ざりつつも独自の文化を持ち、日本を支える産業が根付く名古屋の地で研究が出来ることを楽しみにして来ました。また、個人的には趣味としてゴルフをしておりますので、名古屋周辺には比較的安価で良いゴルフ場が多く、こちらも大変気に入っている名古屋の一面です。

世界トップレベルの研究を遂行している名古屋大学は研究機関であると同時に教育機関でもあり、私は学生に「より多くのモノや人と相互作用を起こせる人材」になって欲しいと願い、日々接しております。研究という「自分で問いを見つけ、自分自身の方法で問題解決をしていく」高等教育の醍醐味を体感し、その後の社会でも個人的な「問い」から社会一般の普遍的な「問い」へと裾野を拓げられる人材を育て、そして自身も成長していく所存です。東山会の皆様には今後ともどうぞご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い致します。

## 着任挨拶

名古屋大学 大学院工学研究科  
機械システム工学専攻 機械理工学講座  
バイオメカニクス研究グループ

**前田 英次郎 助教**



平成 28 年 11 月 1 日付で機械システム工学専攻・バイオメカニクス研究室（松本（健）研）の助教に着任いたしました前田です。出身は兵庫県ですが、九州大学工学部機械工学科を卒業し、その後大阪大学（修士）、イギリス・ロンドン大学クイーンメアリー（Ph. D.）と学生時代を過ごしました。留学から帰国して北海道大学工学部の助教に着任し、この度名古屋大学にお世話になることになりました。私はこれまで修士課程から関節にある腱を対象とし、腱組織やそこに含まれる細胞が力学負荷に対してどのように応答するかを調べるバイオメカニクス、メカノバイオロジー研究を進めて参りました。生体を対象としつつ、自分の基礎である工学的な視点から切り込み、工学・医学・生物学に有用な知見を得ることを目指しています。

名古屋に異動してきて少しずつ馴染んできているところです。まだまだご迷惑をお掛けすることも多々あると思いますが、名古屋大学における教育・研究活動に貢献できるよう精進していく所存です。名古屋大学工学部の皆様ならびに東山会の皆様には、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしく願いいたします。

## 着任挨拶

名古屋大学大学院 工学研究科  
マイクロ・ナノ機械理工学専攻  
マイクロ・ナノメカトロニクス研究センター

**青山 忠義 助教**

平成 19 年卒業(第 66 回)



平成 29 年 4 月 1 日付でマイクロ・ナノメカトロニクス研究センターの助教に着任いたしました青山忠義と申します。知能ロボット学研究室（長谷川研究室）の一員として、教育研究活動に取り組んでおります。東山会会員の皆様に着任の御挨拶を申し上げます。

私は、名古屋大学工学部機械・航空工学科を卒業し、同大学院機械理工学専攻、マイクロ・ナノシステム工学専攻にて博士前期課程、博士後期課程をそれぞれ修了し、平成 24 年 3 月に博士（工学）の学位を取得しました。同年 4 月より広島大学工学研究院の助教として 5 年間務めたのち、本学に赴任いたしました。

学生時代は多自由度ロボットの運動制御に興味を持ち、ヒューマノイドロボットの歩行制御法の提案やその実験的検証などを行っておりました。学位取得後は、高速ビジョンを用いた計測システムに関する研究や、高速ビジョンを用いたロボット制御に関する研究に取り組んでおります。

至らぬ点多々あることと存じますが、名古屋大学の教育・研究活動に貢献できるよう精進していく所存です。東山会の皆様には、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

## 退職の先生のお言葉

ナカジマ鋼管株式会社  
中央研究所 所長

中島 正博

平成 14 年卒業(第 61 回)



平成 29 年 3 月をもちまして名古屋大学大学院工学研究科マイクロ・ナノシステム工学専攻の助教を退職し、4 月からナカジマ鋼管株式会社 中央研究所 所長に着任いたしました。また、8 月から名古屋大学大学院工学研究科マイクロ・ナノ機械理工学専攻の客員准教授に着任いたしました。

私は、平成 13 年 3 月に静岡大学工学部機械工学科を卒業後、平成 18 年 3 月に名古屋大学大学院工学研究科マイクロシステム工学専攻博士課程を修了し、同年 4 月からマイクロ・ナノシステム工学専攻に 11 年間勤務いたしました。数々の研究教育活動に加え、所属学会での活動など、国内外の研究開発機関の方々との交流する機会を得て、多くの刺激を受けることができました。その間、ご指導・ご鞭撻を賜りました皆様に深く御礼申し上げます。

私は、世界に先駆けたマイクロ・ナノメカトロニクス技術の発展に貢献するため、主にマイクロ・ナノロボティクスに基づいたマイクロ・ナノスケールの微細作業に関わる研究を行っています。この分野は、マイクロ・ナノデバイス応用はもとより、近年のバイオや医療技術など、異分野に渡って学際的に、新たな応用や発展が続いています。今後も名古屋大学が当分野において、世界をリードし研究開発の拠点として発展することを期待しています。

ナカジマ鋼管株式会社は、「冷間成形」・「熱間成形」の両方式で建築構造用鋼管を製造している唯一の国内メーカーです。地震大国といわれる日本では、耐震性に優れた建築構造物が求められています。このためには、新たな技術革新やものづくりが重要です。マイクロ・ナノスケールからアプローチすることで次世代材料を開発し、より安価で耐震性に優れた建築構造物の実現を目指しています。また、より効率的で先端的な製造技術や生産設備の研究開発と導入も積極的に行っています。今後も、世界的な視野に立って、時代の先を読み、柔軟かつ大胆に研究開発を続けていく所存です。

東山会の皆様には、引き続きご指導・ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

中部電力株式会社  
技術開発本部 エネルギー応用研究所

**渡邊 激雄**

昭和 52 年卒業(第 36 回)



機械工学科を卒業して 40 年が経ちました。大学院前期課程を修了後、重電メーカーや輸送機器メーカーに勤め、核融合機器、重イオン粒子加速器、極低温冷凍機などの先端技術の開発に従事した後、平成 3 年に中部電力(株)に入りました。以来、空調や給湯に用いるヒートポンプや産業用電気加熱技術を中心に研究開発を行ってまいりました。平成 22 年から 25 年まで、横須賀の電力中央研究所に向向し、その後再び、現在の職場に戻り、引き続き勤務しております。

名古屋大学とのかかわりとしては、大学院を修了してからしばらくは出身の研究室を訪問しておりましたが、次第に足が遠のき、主将も勤めたバレーボール部の OB として体育館に行くくらいでした。平成 15 年ごろから、機械工学科の特別講義、エネルギー理工学専攻の特論、創造工学センターの高度総合工学創造実験の非常勤講師に呼んでいただき、ご縁をいただくことができました。

現在の工学研究科長の新美智秀先生は同級生です。平成 17 年に岐阜大学で開催された日本機械学会の熱工学シンポジウムの懇親会で新美先生にお会いした際に、定年後にゆっくりと博士論文を書こうと思っていると話しました。新美先生から、定年後では定年前の実験データなども利用しにくくなり、追加の実験もできないので逆に大変であり、現役のうち書いた方がいいといわれました。その後、会社の研究業務でかかわりの深かった廣田真史先生から強いお勧めと絶大なるご支援をいただき、社会人ドクターとして後期課程に入学し、博士号を何とか取得しました。主査は新美先生に勤めていただきました。

前述しました創造工学センターの高度総合工学創造実験の非常勤講師を平成 26 年から再び勤めております。大学院前期課程時代に、塑性加工研究室の技官としてお世話になった皆川清さんが、創造工学センターの技術職員として勤務しておられ、35 年ぶりにご一緒させていただいております。

創造工学センター長の酒井康彦先生は、現在、日本機械学会東海支部の支部長を勤めておられ、小職は支部の幹事を務めております関係で、酒井先生にお会いできる機会が多くなりました。平成 30 年 3 月 13 日(火)には、日本機械学会東海支部の総会を名古屋大学で開催する予定です。特別企画(特別講演、施設見学)

をトヨタ自動車の方とともに担当し、準備をしています。大学だけでなく、多くの企業の方にご来場いただければ幸いに存じます。



## 会員からの便り

新日鐵住金株式会社  
名古屋製鉄所 薄板部冷延技術室

**大黒 太郎**

平成 9 年卒業(第 56 回)



卒業してから 20 年が経過しましたが、名古屋大学は身近にある故郷のように感じています。

北部生協の近くの水力実験棟で徹夜で実験したり、仲間と過ごした(遊んだ・・・?) 日々は今でも心の拠り所です。

会社に入って、鉄づくりエンジニアとして設備投資の企画・実行、新商品・プロセス開発、またあるときには工場長として現場で働く 100 人近い方々の管理者を、複数の立場を経験させてもらい現在は、技術室の室長です。室内 11 人の部下の中には名古屋大学が 2 人いてそれぞれの昔話・武勇伝を面白おかしく語ったりもしています。

最近では、去年東山会の企業理事として参加した会合で、学生の頃に親しくしていた友人の竹内秀紀君と久しぶりに会うことができ、イブニングサロンの講演会と一緒に講義室で聴講しましたが、当時の講義風景が過りととても懐かしく感じました。

帰りにラーメンを食べながら、それぞれの会社に入ってから昔話・武勇伝を面白おかしく加えて会社では言えないことも話すことができてすっきりした気分で帰宅しました。

現在、私が働いている鉄鋼業界では海外での現地生産が主流となりつつあり、輸出は減少し、国内需要も低迷する中で企業再編の動きも見えてきています。その中で日本の企業が勝ち抜いて行くためには、より価値のある製品づくりだけでなく、ソリューションによる価値の創造、企業間連携が必要だと思っています。いつか、大学で過ごした仲間たちとそんな仕事ができればいいなと思っています。

追伸

妻も名古屋大学卒業。当時は仲良かったですが今では喧嘩ばかり。

いつか、二人で大学を訪れる機会があればまた仲良くできるかな・・・！？

名古屋大学 大学院工学研究科  
機械システム工学専攻長 教授

松本 健郎



### 2017 年 名古屋大学テクノサイエンスセミナー開催報告

名古屋大学工学部では、毎年夏休みに、東海地区の高校生を対象にテクノサイエンスセミナーを開催しています。このセミナーは、進路を模索する高校生に、大学で行っている最先端の研究に触れ、研究者と交流する中で何かを感じてもらい、工学に対して新たな興味を持ってもらうことを目的に、平成 8 年度から学科持ち回りで開催しており、今回は 4 年ぶりに機械航空系の担当となりました。

前回までは、IV 系内の各専攻で交替で実施していたのですが、新学科体制になったことから、機械航空系全体として対応すべきだとの声が強まり、機械システム工学専攻が世話専攻となり、マイクロ・ナノ機械理工学専攻、航空宇宙工学専攻との合同で、「新たな機械・航空宇宙工学に触れてみよう」というテーマの下、2017 年 8 月 9 日（水）に開催致しました。

- ① 飛べ！！ ドローン
- ② モーションキャプチャによる 3D バイオメカニクス計測
- ③ バイオマスエネルギー
- ④ 水路内での液体混合実験
- ⑤ 10 億分の 1 メートルが創る最先端接着技術！！
- ⑥ 光る分子を使って空気の流れを見てみよう！
- ⑦ エアリアルロボットのシステム・デザイン
- ⑧ 航空宇宙工学と先進複合材料
- ⑨ 航空機をプログラミング！
- ⑩ 衝撃波を制御する
- ⑪ 工作機械工学の最前線を体験しよう

の 11 テーマで参加者を募集しましたところ、55 名の募集人員に対して、愛知・岐阜・三重の 3 県の高校から 1 年生から 3 年生まで合せて 100 名もの応募があり、

断腸の思いでくじ引きを行い、58名を採択致しました。

当日は、朝 10 時より開会式で学科の説明や実験する際の注意を行った後、11 時より各グループに分かれてミニ講義、お昼休みを挟んで 15 時過ぎまで実験、その後、閉会式と教員・TA の学生を交えての交流会、という順番で進めました。後で受講生アンケートを見ましたが、「実験が楽しかった」、「最先端の技術に触れられてよかった」、「工学への興味が高まった」、「名大に進学したくなった」など大変好評で、彼らが大学を受験する際に、機械航空系の人気が高まることを予感させる結果でした。

末筆になりましたが、幹事の義家 亮先生を始めとする実行委員会の先生方、さらには実際に講義・実験を担当下さった研究室の皆様、また、財政的支援を賜りました名古屋産業科学研究所に感謝申し上げます。

平成 29 年度 東山会会報

平成 29 年 12 月発行

発行	東山会事務局 <a href="http://www.higashiyamakai.com/">http://www.higashiyamakai.com/</a>
住所	〒464-8603 名古屋市千種区不老町 名古屋大学工学部機械工学教室内
電話・FAX	(052)789-2714
E-mail	mechalum@mech.nagoya-u.ac.jp